ネコまた

ネコスギ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。

　この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネコまた

【Nコード】

N9036R

【作者名】

ネコスギ

【あらすじ】

　今年から高校生になる　上市（かみいち）　彰（あきら）は学校が終わった帰り道猫又の娘を拾った。それから始まる猫又の娘との共同生活。そのほのぼのした日々を、観察日誌に主人公が書いていく物語です。

登校

４月８日午前６：４０分
今日はこれから始まる高校生活一番最初の通過儀礼、入学式だ。
ベットから体を起こす。
窓から差し込む陽光が少し眩しい。だけど、いい感じにそれが体を温めてくれて気持ちが良かった。
時間的にも余裕がある。いつもならもっと遅い時間に起きるのに、不思議なものだ。
母が作る朝飯にありつけるまでまだ時間はある。
「さてと、着替えるか。」
正直温かい布団にまた潜ってもふもふとして居たかったが、また潜ったら寝てしまうと、今までの経験が
教えてくれたので起きることにした。
新しい制服を着た。
僕の入った高校の制服は、紺のブレザー、白いYシャツ、鼠色のズボンと一般的なものだ。
ズボンとYシャツを着た後ブレザーを手にした時、なんとなくそのブレザーに鼻緒を押し当て臭いをかいだ。
クン　クン。
これは自分の癖みたいなもので、新しいものを身につける前に無意識にその臭いを嗅いでしまう。
「なんかこうすると落ち着くんだよね～。」
ブレザーの香りを堪能した後時計を見た。
６：５７分
うん。そろそろ母の朝食ができている頃だ。
自分の部屋から出て一階に降りて、居間へ向かう。
キッチンには弁当の準備をする母がいた。
「おはよう母さん。」

「おはよう～。あら～新しい制服ね～。結構似合ってるじゃな～い。」
「うん。動きやすいし結構気に入ったこの制服。」
ちなみに僕の父は僕が一年生の時病死した。だから、今まで女手一つで僕のことを育ててくれている。
結構おっとりとしていて、いつでも笑顔を絶やすことのない。母はそんな人だ。
今日の朝食はベーコンエッグと味噌汁とご飯だった。
朝食を食べ終わると、歯を磨き一度自分の部屋に鞄を取りに行った。
僕の通う事になる高校校則では特に鞄は指定はないので自由だ。
小学校、中学高と鞄は指定のものだったので、自分のエナメルバッグがとても新鮮みを帯びていた。
しかし僕は、この鞄の臭いは嗅がなかった。
エナメルバッグを買った当日にこれでもかと嗅いだからだ。
とりあえず、筆記用具とファイルを入れ玄関に向かう。
「あ、これあなたに渡すの忘れていたわ～。」
お母さんが今からエプロン姿で急ぎ足でやってくる。手に何か持っているようだ。
「これこれ。はい、どうぞ。」
母が渡してきたのはお値段の高そうな腕時計だった。
「こんな高そうなもの使っていいの？」
「あ～これね～。お父さんの形見なのよ。」
「え！？そんな大事なものを！？？」
「あ～別にいいのよ。その時計だって形見としてただ閉まってあるより、誰かに使われたいって思ってると思うから。それともその時計いやだった～？」
「ん～ま～、嫌じゃないけど。ま～ありがとう。大切に使うよ。」
母の言う通りなのでその通り身につけることにした。
「ちなみにこれいくらしたの？」
「え～と～、確か～10万くらいだったかしら～？」

「・・・　・・・。」
「ほら～何ボーとしてるの早くいかないと遅刻しちゃうわよ～？」
あ、いけないいつい肝が冷えるようなことを言われて硬直してしまっていた。
「うん、そうだね行ってきまーす。」
「はい。いってらっしゃ～い。」
とりあえず学校に向かうことにした。
早速僕は１０万もする時計を見た。
７：２０
「よろしくな。」
僕は腕時計に意味もなく話しかけてから、自転車で学校に向かった。

登校（後書き）

初めてこういった小説を書いてみました。
自分すっごい猫好きなんで、猫の良さが読者にも伝わるような物語になるように今後頑張っていきます！

路地

僕が通う高校は僕の家から、ほぼ一本道だ。
だから別段迷ったりするようなこともなく、遅刻寸前というわけでもなく、普通に登校出来た。
こういう所で変な世界に飛ばされたり、はたまたかわいい女の子と出会って友達に……。
なんて夢物語が起こる兆しすらない登校だった。

学校では、何か特別なイベントがある訳でもない普通の入学式。
これこそ教師となんの面白みもなさそうな担任。
かわいい女の子がいきなり話しかけてきてくれることもない。
それどころか誰一人話しかけてくれなかった……。
でも社会とはそんなものだと割り切ってしまえば、そんな物なのかもしれない。
後は自己紹介をして、その後すぐ終礼をして終わり今日の所は下校となった。
「起立、きをつけ、礼。」
「さようなら。」
号令とともに学生たちは、蜘蛛の子を散らすように教室からでて下校していった。
僕もその中に紛れるように下校した。

周りでは中学が一緒だった人同士や、今日出会って友達になった人など様々だった。
でも、みんな誰かと”一緒”に帰っている。
僕は勿論一人だ。
「今年もまた一人なのかな。」
そう呟いていた。

小学校、中学校と人と付き合うことが苦手な僕は、いつでも一人だった。
唯一僕に興味を持ってちゃんと見てくれているのは――――――――母だけだった。
そんなことを考えながら自転車を走らせていると、”路地”を走っていた。
路地？それは可笑しい。
僕が登校に使った道は見通しの良い大通り、しかも学校までは”一本道”はずだ。
路地に入る必要がない。
道、間違えた！？
そう思った時にはもう遅く、自分が今どこにいるかさえ分らない所まで来ていた。
しかし、まだ諦めるのはまだ早い。
僕にはケータイという超便利な情報端末機器が有るのだ。これのＧＰＳ機能を使えばたちどころに、自分の居場所が分かる優れものだ。
「えーと確かここを押してっと。」
ピー。
［ｅｒｒｏｒ］の文字が画面に表示された。
ボタンを押す⇒［ｅｒｒｏｒ］
ボタンを押す⇒［ｅｒｒｏｒ］
ボタンを押・・・・
ケータイを壁にたたきつけぶち壊そうと思った。
しかし、ケータイはとても高価な機器なので思いとどまった。
どうやら”電波が通じていない”ようだ。
「さて――――どうしたものか。」
立ち止っていては何も始まらないかと思って、我武者羅に前に移動進むことにした。
そのうち大通りで出ればそれなりに分るだろうと思ったからだ。
それに何時までもこんな人気のないうえに、

電波まで使えない不気味なところにいたくはなかったからだ。
道を進んでいると、道が二つに分かれていた。
右と左、どちらに行ったらいいものか。
左の道も右の道もどちらもよく似たようなものだ。
しかし、どちらも全て一緒というわけでもない。
丁度左と右を分断している壁。
左の道はその壁の陰に隠れすこし薄暗くなってちょっと不気味だ。
右はそれに比べ陰になっていないのですこし明るい。
だから、右に行こうとかと思った。
「にゃー。」
丁度その時だった。左の道のほうから鳴き声がした。
その声は僕が右に行くのをとめた。
それから左に自然と足が向かっていた。
さっきまで薄暗いから気味悪がっていたはずなのに、僕は左の道を選んだ。

左の道を進むと、はじめは薄暗かった道はいつの間にか明るい道になっていた。
路地なだけあってそこは、道幅は軽自動車一台がやっと通れる道幅だ。

あの鳴き声の正体が知りたい。

その時はそのことだけしか考えてなかった。
鳴き声ひとつで、道に迷ったことを忘れてしまっていた。
「結構進んでるけどなにもいないな……。」
内心あの鳴き声は気のせいではとも疑っていた。
諦めて自転車に乗って一気に通り抜けようと思った。
そう思って視線をペダルのほうに向けた。
自転車越しに茶色の角が見えた。

自分の右下に目線を向けた。
茶色の角の正体は段ボールだった。
丁寧にしめられている。
ダンボールには張り紙が貼られていた。
拾え。
張り紙にはその文字が書かれていた。
とても命令口調な頼み方だった。
「不気味すぎる……。」
ガタ　ガタ
段ボールが揺れ始めた。不気味感＋１０ｕｐ
ピタ
止まった。
ガタガタガタガタガタガタガタガタガタガタガタガタガタガタガタ
ガタガタガタガタガタガタガタガタガタガタガタガタガタガタガタ
ガタガタガタガタガタガタガタガタガタガタガタガタガタガタガタ
ガタガタ
ものすごく揺れ始めた。
それもさっきより激しく。不気味感ＭＡＸ
余りの不気味さに僕は自転車を盾に引き下がる。
ピタ
また止まった。
何だよこれ！？これマジ何だよ！！？？？
かなり僕は心から動揺していた。
グググ
段ボールの上の部分膨れ上がってきた。
ガムテープで綺麗に止められているため、いい感じに膨れ上がる。
グググググググ
はち切れそうになってきた。
何かが段ボールから出ようとしているようだ。
ぶぱぁん！

ついにその段ボールの蓋が開かれた。
段ボールから出てきたのは――――茶髪の少女だった。
「はい……？」
僕の頭には疑問符しかなかった。

段ぼーる（前書き）

投稿遅れてましたすみません（汗）

ホントは昨日にも投稿するつもりだったんですが……。

段ぼーる

段ボールから飛び出た少女は、こちらをボーと見つめている。
少女の顔立ちから多分僕より少し年下くらいだから、中学3年生くらいだろうか？
そう推測すると多分背は150？くらいだと思う。
しかし正座しているせいで、下半身は段ボールに遮られて見えない。
髪は肩から腰にかけてすらっと伸びた長髪で、艶やかな茶髪だった。
少女は無表情のままさっきからずっと、僕のことをボーと眺めている。
正直この状況僕としてはかなり気まずい。
特に話しかけることもないわけだし。
こんなにまじまじと見つめられること自体、今まで無いわけだから。

この少女が僕をなぜ見つめているのだろうか？
何か僕の顔に付いているのだろうか？
そんな事を思った時だった。
「汝名はなんという？」
いきなり話しかけてきた。
その声は鳥の囀りのように透き通った綺麗な声だった。
でも何でこんなに昔臭い喋り方のなのだろう。
それにしても少し唐突だと思った。
さっきまでの沈黙は何だったのだろうか？
「おい。聞いておるのか？汝の名はなんというのじゃと聞いておるのじゃ。」
「あ、すいません。」
つい反射的に謝ってしまった。
名を聞かれている事をすっかり忘れていた。
段ボールから少女が現れる事がかなり僕には、理解不能な事態だっ

たからだ。
また尋ねられるのも嫌なので、相手にとりあえず名前を言った。
「え……と、杉猫　彰って言います。」
「ふむ、汝には我の言葉が通じぬのかと思うてしもう所だった。答えられるのならば、はよう答えんしゃい。」
「あ、はい。すいません。」
さっきから謝ることしか言ってないがする。
この少女、見た目の割になんかほんと昔臭い話し方だな～。
それにこの子着物着てるし、ますます古臭いな。
「汝はどうやら人間の雄のようじゃが、歳はいくつじゃ？」
いやお前こそ何歳だよ！？それに人間の雄ってなんだよ、雄って……。
突っ込みたくなる様な、中学生くらいには見えない饒舌な喋りだった。
「今年で16です。」
「16かまだ若いのう汝。」
「いやお前のほうが若いだろ！？見た目的に！！」
ついツッコんでしまった。
しかもかなり大声で。
お恥ずかしい。
「ん？お主我を見た目で判断したか？
やれやれ。最近の若いもんはこれだからいかん。」
なんか自分より年下の相手に見下されてる。
なんで見下されてるんだろ？
ゆとり世代だから？まだ高校1年生だから？
てか最近の若者ってなんだよ？
こいつほんと何歳だよ……。
っと”心の中”だけでツッコミを入れた。
「ん？お主我の歳が気になるのか？我は94じゃぞ？」
94？94歳？この中学三年生が？

この中学生３年生位の少女が９４歳のお婆ちゃん？
そんなバカな。
どっかの小学生でも思いつかんバカすぎる嘘だ。
まるでといてくださいと言っているようだ。
「そんな小さい物の好きな紳士が好みそうなそのロリボディでそんな馬鹿な話がありますか？うそならもうちょっと現実味のある嘘を言……？
ちょっと待て？僕はお前に歳なんて聞いてないぞ？？」
「何を言うお主たった今、心でそう言ったではないか？」
「へ？」
どういう事？
「だから、お主が心で言ったと何度言ったらわかるんじゃ？」
なにそれ意味がわからない。
「ええいお主！お主にはやはり日本語が通じんのではないか！！！！」
ああなんか怒りだしちゃった。
僕には日本語がわかってないのかもしれないが、
お前は常識がわかってないかもね。
取り合えぜ今の状況は、僕は心の中だけでしか話してない。
しかし、この子には伝わっている。
「そうじゃ。」
あああ、心が読めるってことか。なるほど。
「その通りじゃ。」
って！？えええええええええ！！！！
「そんな驚くこともなかろう？現に先ほどからこうして、話しておるではないか？」
お前人間か？いや、超能力者か何か？
「我か？そういえばお主がバカみたいな事ばかり云う物じゃから、我のことを話すのをつい忘れていてしもたわ。」
あれ？僕が悪いの？

そんな可哀想な子を見るような目で僕を見ないでほしい。
「我はな猫叉という妖怪なのじゃ。」
「へぇー妖怪ですか。妖怪ね。」
と言いつつ自転車にまたがる。
「猫叉は猫の妖怪の中でもかなり高位になるじゃ。」
「ほーほー」
適当に相槌を打ちながら、足をペダルにかける。
「お主を我の僕とし、」
「ではさようなら。お元気で」
僕は力いっぱいペダルを踏んだ。
そして逃げた。

段ぼーる（後書き）

次は挿絵とか色々機能を加えたいと思ってます。

拾い者（前書き）

早速４話投稿します！

拾い者

僕は逃げていた。
夢中で自転車をこぐうちに、あの変な路地から抜けたようだ。
外はすっかり夕暮れ時だ。
赤いトマトのように真っ赤な太陽が沈んでいく。
「逃げてきちゃった……。」
慌てていた為最後どんな逃げる顔で僕を、少女は見ていたのか分らなかった。
ただ胸の中がもやもやする。
見ず知らずの少女と少し話しをしただけなのに、
たったそれだけの関係なのに。
なんだろうこの気持ち。
「でも……もう、遅いよね。」
もやもやする事があれば、僕は割り切ってしまってすっきりしている。
あの時もそうだったっけ。
”あの時”とは”父が死んだ”時だ。
父は僕が小学一年の時若くして他界した。
死因は心臓発作。
あの時の僕は父の死を心のうちの何処かで、割り切っていたんだと思う。
”そういう運命だったんだ”と……。
「そういう運命だった、か。」
運命なら仕方ないそういう簡単な理屈だ。
これがもっとも簡単に割り切れる理由だと思う。

　僕は家に辿り着く事が出来た。
本来なら半日の学校なら、もっと早く変えることが出来たに違いな

い。
「ただいま〜。」
さっきの事を忘れようとする様に、明るくただいまをいった。
でも返事はない。
この時間は親が働きにまだ出ている。
帰ってくるのはいつも7時を回った頃だ。
現在時刻は4時30分、帰っていない筈だ。
部屋に戻って不貞寝でもするかの様に布団にうずくまる。
「ふにゃ〜。」
ついそんな声を漏らしてしまった。
布団がどうやら洗い立てで、とてもふかふかで良い匂いがしたからだ。
顔を布団に押し付けコレでもかと、胸いっぱいにその芳醇な香りを満喫した。
いつもならココでこのまま永い眠りにつけただろう。
でも、眠れなかった。
まだ胸中のもやもやが治まっていなかった。
何でこんなにすっきりしないのか。答えいたって簡単だ。
あの少女から自分が逃げたからだ。

「何で僕逃げたんだろ……。」
自分にそんなことを問いかける。
自分でもこのもやもやはどうやったら消えるかぐらい分る。
でもそれが分らない。
いや、分ろうとしない。
あの場から僕が何故逃げたのか、それは怖かったからだ。
別に彼女が妖怪だの何だという、電波だからとかそんな理由ではない。
むしろ好みのタイプだったかもしれない。
ただ友達が出来るのが怖かった。

正直あの少女との会話は少し楽しかった。
ちょっと非現実的で、だけどどこか嘘じゃないような。
凄く馬鹿げた話だとは思った。
だけどその分たのしかった。
凄く短い時間なのに、凄く短いのに凄く長く感じた。
その分その少女との別れが怖くなる。
僕をあんな目で見てくれる人家族以外にいるはずがない。
そう思っていたのに、ただ見られているそれだけで僕は彼女に心奪われたのかもしれない。
だから余計彼女との別れが怖い。凄く怖い。
どんな事も、分かれてしまえばそれっきり。
例えば小学校で仲良かった奴が、高校出るまでには誰かすら忘れる。
僕はそんなのがとても嫌だった。
だって悲しいから。
でも、あんな目で見てくれた唯一の少女との別れが、僕が相手から逃げるなんて。
そっちのほうがもっと嫌だ。
「これじゃ駄目だ。」
僕は決心した。
服を私服に着替え、家から飛び出た。
自転車に跨りまた勢いよくペダルをこいだ。
無我夢中だった。
あの少女に会いたい。
あの少女ともう一度話したい。
今度はちゃんと別れを言いたい。
あんな中途半端な別れだけは嫌だ。
そう思った。
「あんな路地また辿り着けるかな？」
外はすっかり真っ暗だ。
街頭が夜道の道案内をしてくれている。

朝と夜では道はという物は様変わりする。
でも、意外と簡単に見つけられた。
適当に走っていただけなのに。
またあの二手に分かれた道だ。
「……。」
何だろうか、ただ二手に分かれているだけの道なのに。
これからの僕の運命を決めるかのような気がした。
右に進めばあの少女との出会いはなかったことになる気がした。
左に進めばあの少女との出会いの続きが待っている気がした。
そしてどちらを選ぶのか、そんなの決まってる。
「左だな。」
少女との未来を僕は選んだ。

でもあの少女もうこんな暗がりなのにまだいるだろうか。
そんなことをいまさら思っても仕方ないか。
いなかったらそこまでだが。だからといって、いると言う可能性は捨てるのはもったいない。
「何じゃお主どこかに行ったと思ったら、戻ってきおったのか？」
「別にお前に会いに来たわけじゃないよ。偶然通りかかっただけ。」
「ほ~う。」
少女はいた。まだこんな暗がりに一人でいた。
「お前なんでこんな時間までこんなとこいるんだ？」
「他にいくところがないからに決まっておろう。」
それもそうか。ではこの先この少女はどうやって暮らすだろうか？
まさかこの段ボールが家？
そんな馬鹿な事あるわけ……ないよな？
「じゃ、その段ボールで一生寝泊りする気だったのか？」
「他にいくとこがないのなら仕方なかろう。」
「でもお前今頃でも結構夜冷えるのに、雪とかどうすんだよ？」
「仕方なかろう。我慢するだけじゃ。」

なんて言えばいいんだろう。なんて言ってあげればいい？
「うち丁度部屋の空きがあるんだよな。」
俺何言ってるんだろう。少女でも誘拐するのか？
「それは我をお主の家に泊めてくれるといっとるのか？……本当……なのか？」
少女がこっちをまた見ている。
僕は黙って頷いた。
段ボールに正座する少女が突如立ち上がる。
そして、頭から僕の鳩尾目掛け突っ込んできた。
「ぐフッ」
少女はそのまま僕を腰に手を回し抱きしめてきた。
「ちょっ！？」
僕は動揺した。
普段女性との接点が限りなく少ない僕にとって、コレはかなり刺激は強かった。
その香りは森林に迷い込んだ旅人が、胸いっぱいにそこの空気を堪能した時の芳醇な大自然の香り。
少女からはいい匂いがした。
山の中にある草花や、澄んだ水や空気そんな香りが少女からは香った。
「お主我は妖怪なのじゃぞ？本当に……本当にいいのか？」
少女が埋めていた顔をあげて僕の顔を見る。
目には少し滴がたまっている。
「妖怪だからってお前が俺をとって食うわけじゃないんだろ？」
「でも、お主さっきは逃げたではないか？」
「あ、アレは別に妖怪だからとかじゃなくて……。」
そんな顔で見ないでほしい、凄く恥ずかしくなってくる。
あまり恥ずかしさに顔を左に背ける。
「とりあえずお前住むとこないならうちに来いよ、細かい話はそれからだ。」

「ありがとう。」
少女は僕にそういった。
その時の少女の笑顔を僕は一生忘れないと思う。

帰りは自転車の二台に少女が腰掛ける形で帰った。
少女は背中に亀のように段ボールを背負っている。
少女にはとってかなり貴重な物らしい。
「ついた。」
到着時刻7時30分。
母が帰ってきている……。
どっかのラノベの主人公なら都合のいいように親が、海外出張中とかなのだろうが生憎我が家にはそういった便利設定は存在しなかった。
「ただいま。」
「遅いお帰りねうちのお坊ちゃまは。」
「そういう言い方はないだろ？ちょっと道に迷ってね。」
「ふ〜ん。」
都合のいい事に母は今台所で調理中だ。
今なら二階の俺の部屋にこの子を気づかれずに連れて行けそうだった。
（よし、いまだ。）
足音で気づかれないように慎重に階段を上って部屋に入る。
どうやら気づかれずにすんだ様だ、今日はついている。
部屋に入ったとたん凄い眠気が襲ってきた。
夜食はいつも一人で先に食べているので、親は食べた後だと思っているだろう。
我が家で母が夜調理をするのは、明日の弁当と自分の夜食の分のためだ。
風呂も僕はシャワーだけだから先に入ったと思ってるだろう。
「ふわぁ〜今日はコレで寝ないか？」

「ふむ、我もあんなところに一日正座していたせいでかなり疲れた。」
ということで寝ようかと思ったんだけど。
早速問題が発生。
ベットがこの部屋に一つしかない。
仕方ない俺が床で予備の布団と枕で……。
「お主は床はココじゃろ？何を布団を出しておるじゃ？ここにあるではないか？」
「流石にベットで男女二人寝るってのわね～。」
「何かいけないことなのか？」
「いや、別にいけないってことでもないんだけど。」
「ではお主もココで寝ればよい。」
「え、でも……そんな。」
「お主まさか９４歳のお婆ちゃんと寝るのが恥ずかしいのか？」
「だ、誰がお婆ちゃんと寝るのが恥ずかしいだと！？」
「いいよ！上等だ一緒の布団で寝ればいいんだろ？」
「それでこそ日本男子じゃ！それくらい威勢がなければな。」
つい口車に乗せられて寝ることになった。
ま～ただ寝るだけだけどね。
疲れていたの事もあって直ぐ深い眠りについてしまった。

一日目終了。

拾い者（後書き）

これでこの作品の一日目がやっと終わりました。長かった本と長かった。

４話で一日ではなく三話で一日構成に、したかったのですが以後頑張ります！

さてさて次からはこの二人の生活が始まります。

初まった。（前書き）

やっと5話完成。

初まった。

４月９日午前６時１７分
今日の朝は何時もとは一味二味も違う。
何処が違うのか。
その答えは今僕の丁度腹の上に、僕と十字の形になるように重なって仰向けで寝ている。
　夢でぬり壁的な妖怪に押し潰されていたのは、多分この少女の所為だと思う。いや、それ以外考えられない。それにこの少女は妖怪らしいし、夢に出てきたぬり壁も妖怪という共通点から考えても間違いないと思う。そんな夢の事はどうでもいい。しかし、問題なのはこのまま少女が寝たままでは僕も起きる事が出来ない。僕が起きるために体を起こせば絶対ベットから少女は落とされるからだ。
どうしたものか。
ここで僕が選べる行動は二つ。
Ａ・少女をベットから落としてでも起きる。
Ｂ・少女がおきるのを待つ。
　今日は土曜日なので、学校は休みで早く起きる意味が無い。
なら別にこのまま二度寝に……。
あ、トイレに行きたくなってきた。
之ばかりは何に変えても起きなければならない。
たとえ気持ちよく寝息をたてている少女を起こす結果となろうが？
？？？？犠牲は仕方ない。
このベットに世界地図を描く事は決してあってはならないから。
体を力いっぱい起こした。其れによって必然的に少女が転がされる。
ゴスッ
「ぎにゃっ！？！？！？」
そしてベットから落下した。南無産。
落ちた少女に目もくれずトイレに向かう。

後でどうぁの少女に謝るか、それともいっそ少女が自身が勝手に転がって落ちたことにしてしまうか……どうしたものか。

～トイレタイム～

「見事に落としてくれたましたね」
氷の様に鋭い睥睨の眼差しで少女が僕に問いかけてくる。
騙すべきか考えながら自分の部屋に戻ったら少女が笑顔で、僕を待っていた。
少女は”心が読める”ということを忘れていた。
「本当にすいませんでした」
古き時代から現在に至るまで続いてきた、相手への謝罪の意思を最大限に示す姿勢を僕は直ぐにとった。
詰まる所土下座で少女に謝った。
「よくもま～人のこと寝床から落としやがってくれましたね。ま～朝っぱらから怒鳴り散らしたり暴れるのも嫌なので、今回だけは見逃してあげます」
「本当にすいませんでした」
綺麗におでこを地面に押し付けたまま、もう一度謝罪した。
無心
「お主何時までその格好でおる気じゃ？」
「…………」
「……ん？心読まれぬように何も考えないようにしとる訳か」
「…………」
ドカっ
「ゴフぉッ！！」
土下座状態の僕の背中を少女が踏みつぶした。

一部の人にとってこれは最高のご褒美なのかもしれないが、僕には屈辱と背中の激痛しか感じられなかった。
「安心せい、主の心などもう読んでおらん。またたんまりを利かされては困るからのう、それにお互い話さなければならぬ事も沢山あるわけじゃし。」
あ、もう心を読まれていないのか本当に良かった。
妙なことを考えてまたこの少女の機嫌を損ねるようなことになっては元も子もないからだ。それにこの少女にはいう通り聞きたい事も沢山あるわけだ……。
とりあえず座り直して少女に向き直った。
「うむ、わしからの質問は主からの質問がすべて終わった後ということでいい」
「じゃ、まず僕から聞いていいか？」
「では、まず一つ目の質問。貴女の名前はなんですか？」
まず相手の名前が知りたかった、話を進めるうえでも名前を先に知っておいた方がやはり話しやすいし。
「わしの名か？そういえばちゃんとした自己紹介がまだじゃったな。わしは猫又の娘、名は縁起じゃ」
縁起？変わった名前だと思った。
もっと猫又の娘らしく猫につける様な名前かなと思っていた。
猫又の娘が猫につける様な名前というのも、いささか変な話かもしれないが。
「では次に、縁起さんあなた本当に妖怪なんですか？」
今更な気もする質問なのだがここまで、彼女が心を読めること以外に人外な点を見ていないからだ。
心を読む位なら超能力者にもできる。縁起が妖怪なのか超能力者なのかという点、正直どっちでもいい気もでもないのだが。
「勿論じゃ。しかし何かその証拠を見ねばどうせ納得できんのじゃろ？ならば、そうじゃのう……動く猫の耳や尻尾とか見れれば確信できるじゃろ？」

「ま、何の変哲もない人の頭から、猫の耳が生えたりしたら僕も納得できます。」
「よし。では今から耳を生やすのでしっかり見ておけ」
ニョキッ
縁起の頭に猫の耳様なものが生えた。
茶色と白の三毛猫の様な模様だった。
「本当に妖怪なんだなお前」
「別に触ってみてもよいぞ」
許可が出たのでとりあえず触ってみる。
ツンツン
手を伸ばして指で突いてみた、突かれた耳がパタパタと動く。
次に念入りに触ってみる。
さわさわさわ
毛が艶々でとても滑らかでさわり心地は抜群だった。
さわさわさわ
ドゴォッ
縁起の右アッパーが僕の顎を打ち上げた。
「何時までさわっとる気じゃ！」
脳みそが揺れた、一瞬視界が揺らいだ。
失神一歩手前だった。
「触っていいとは言ったが、触りすぎじゃ！」
「つい気持ちよくて」
猫耳が生えたら人間の耳はどうなったのか、など色々疑問もあるがツッコんではいけない。
「ではほかに聞きたいことはなんじゃ？ほかにもあるのじゃろ？」
「え……とそれじゃ、なんであんなところにいたわけ？」
「ああ……その事か、そうじゃなこれから主に世話になる身じゃから教えておくかのう」
すると少女は少し頭で考えてから話し出した。
「わしは実は今修行の身なのじゃ」

「修行？」

「そう修行じゃ。現猫妖怪の首領を務めるわしの父が”将来猫又としてわしの跡を継ぐとき、相応しい器であるために単身人の郷に修行してこい”と言い出した。そして、気づいたらあの場所に段ボールに閉じ込められ放置されていた」

なるほど、つまり親の気紛れであんなところに送りこまれたということだったのか……。

自分の娘を段ボールに閉じ込め単身見知らぬ土地に放置する親って……。

「でも縁起さん確か９０歳過ぎのお婆ちゃんなんですよね？そんなお年で修行なんて必要なんですか？」

「まぁ９０過ぎとはいえ人間の年でいえばわしは１４～１５歳くらいじゃから。父から見ればまだまだ小童というわけじゃ」

「あ、そういうことですか」

猫又でいえば１４～から１５歳か、だからこんな容姿なのか。

「では次はわしからの質問よいか？」

「あ、うん」

「主の名など聞かせて欲しい」

そういえばまだ僕の自己紹介などその他もろもろがまだだった。

さて、名前と家族について簡単に説明するか。

「え…と、まず名前は上市（かみいち）　彰（あきら）。家族は母と僕の二人暮らしで、父は僕が小さいときに死別」

「ふむそれだけわかれば十分じゃ」

それから縁起は目を細めて手を口に当てたまま硬直した、何か考えているようだ。

何を考えているのだろうか…全く見当がつかない。

僕が言ったことの中に何か気になることでもあったのだろうか？まぁ、どうでもいいか。

「ふむ、実はわしの知人で父親を失ったものが確かおってな、わし

と主が出会ったのに何か縁でもあったのかもしれんと思って考えてみたんじゃ」
「へえ、でも親から猫又の知人がいるなんて一言も聞いたことありませんよ」
妖怪と知人って設定か、なんかよくある展開っぽい感じもしなくもない。
「ま、正直どうでもいい事なんじゃがな」
確かに知人であろうが無かろうが縁起をここで養っていかなきゃいけないことには変わりない。
どのタイミングで親にこの事を伝えるべきだろうか、この先どうしたものだろうか……。
勉強以外にまた新たな悩みの種が、僕に植え付けられた。

初まった。（後書き）

主人公の名前変更しました。

コレから

現在時刻6時53分

起きて彼此30分くらいなるわけだ。今の服装は縁起(えんぎ)を探しに出た時のまま私服。

90歳の婆ちゃんとはいえ一人の女性だ、流石に目の前で着替える勇気はなかった――――――てか、眠いので早く寝たかった。

おまけに昨日は風呂も入っていない。

その理由は以下同文。

「お主…いや、彰じゃったか。この家にわしを住まわせるといっておるが……そなたの母上は承諾済みなのか」

「…………」

縁起の言う通りまだこの少女のことを伝えてない、この家に一緒に住まわせたいと考えている。だから縁起の事を隠し通すことは多分無理だ。しかし、いくらのほほんとしたあの母とはいえ許可してくれるという保証もないわけだ。

「彰は黙り込むのが好きなようじゃな。ま～いきなりわれがこの家に上り込んだ様なもんじゃ、出てけと言われても仕方ない。そうなったらそうなったで潔く出て行く事にするよ」

「何言ってるんですか、反対されそうになったら僕が母を説得するだけです。この家から縁起さんを追い出させる様なことは絶対させませんよ」

とはいえ縁起を追い出すような酷いことは絶対したくない。この家に招き入れて一緒に住もうなんて言いだしたのはこの僕自身なのだから。

「そういってくれるとわしも気が楽になるわい」

そういって縁起が軽く笑みを浮かべた。それを見ていたら縁起にうちに来いといった時を思い出した。抱きついて来た時のあの笑顔見せられて見捨てることなんてできる筈がない。ま～それはそれと

して、何時この事を母に話すべきか。
近いうちに絶対話さなければならないとはいえ、流石に駄目だと言われた時のことを考えるととても訊き辛い所である――――――これは困った。
すると、縁起が立ち上がって部屋を出て行こうとする。
「では、ちょっと行ってくる」
こちらに見向きもせずその言葉を言い捨てながらドアを開いた。
「ん？ちょっ、どこ行く気だよ」
「決まっておろう、彰の母上に一緒に住まわせて貰えるか訊いてくるのじゃ」
そう言うとスタコラさっさと、部屋を出て母のいる居間に向かった。
僕はそれを聞いて思考が停止してしまった「へ？」と気が抜けた声しか出なかった。

～居間～

僕は慌てて縁起の追って居間に向かった。
「初めまして。上市　彰殿の母様、名は縁起と申します。訳あってこの家に一晩泊めさせて頂きました。母様に一言も挨拶もなかったことをお詫び申します」
「え～といまいちに状況が分から無いのですが……」
「母様じつは我には帰る家が無いのです。ですから此方に良ければ暫く居候させて頂きたいのです」
ドア越しにそんな会話が飛び交っている。
母は少し動揺しているの様だ。そりゃ～いつも通り朝食を作っていたら、そこに見ず知らずの少女がいきなり出てきたのだから無理もない。
この展開についていけなくて戸惑っている母さんと、居候させてほしい母さんに頼み込む縁起。
なんだかこのまま、二人だけで話させていたら拉致があかないので

はと思った。
　このまま二人だけで話させてる訳にはいかないだろう。かといって、もし母さんに反対されたらと不安になる。
「母さん詳しくは僕が説明するよ」
だけど、焦れったくなって我慢できず二人の会話に割って入っていた。
　僕の方を見て「あらぁ〜彰ちゃんお早う〜。じゃ〜教えてもらおうかしらぁ〜」と何時もののほほんをした表情で問いかけて来た。
そして、昨日会ったことを一通り話した。包み隠さず全て、縁起が妖怪で猫又の長になるために、人の郷に単身修行に来たことを。これをきいて普通信じてはくれ無いだろう、僕がそれを言われたら「熱でも引いたか？」と絶対信じないだろう。一通り話を聞いた母が口を開いた。
「なるほでねぇ〜まぁ〜分かったわ〜、良いわよ〜この家で一緒に暮らしましょう〜」
「え？良いの？」
「別に娘が一人増える位だし〜それに、人助けみたいなものだと思えばどうってことないわ〜」
流石僕の母だ。
　一般家庭のほとんどの奥様方が断るようなことを、悩むことなく平然を承諾してしまった。とは言えちょっと少女に微笑んでもらった程度で、名も知らなかった彼女を助けようとする自分が言えた口ではないが。全く”子は親に似る”というが旨いこと言ったものである。
　母のそんな返答を聞いていた縁起はきちんと正座して、母の前で床に手をつき「本当にありがとうございます」と丁寧に礼を言っていた。「あらぁそんなご丁寧に、そこまでしなくていいのぉ」という会話を背中越しに聞きながら茶を三人分淹れていた。
「とりあえず、これで一息つきません？」
茶で一回落ち着こうじゃないか。母も縁起も「ありがとう彰ちゃ

〜ん」「そうじゃのう」と僕の淹れた茶を受け取り居間のテーブルを中心に取り囲むように各々が腰かけた。市販の極在り来りなお茶っぱで淹れたものだが、この渋みの聞いた香りがまたいい。自分で入れ物とは言え匂いフェチの僕には嗜好の香りなのだ。
ふ〜。っと三人で一息つき落ち着きを取り戻してから最初に母の口を開いた。
「それじゃ〜縁起さんは修行でここに来たそうですが、具体的に修行とは何なのですか？」
そういえば修行について僕はまだ何も知らなかった。
修行は彼女にとって単身で見知らぬ土地まで行かせる程重要なことなのは知っている。だが、知っているのそこまでだ。実際どんな事をするのかは全く分からない。
「修行の事か。それは父が言うにはあのダンボールが教えてくれると聞いた」
そういって縁起は僕の部屋に置いてある段ボールを取りに居間を後にした。
段ボール。板紙を多層構造で強靭にし、包装資材などに使用できるよう加工した板状の紙製品。その他とある単身で敵に基地に侵入し、CQCにより全滅させてしまう凄い人の愛用品であったりする。これの一体どこにそんな修行と関係するようなところがあるのか全く分からない。
てっきり彼女が誰かに拾って貰い易い（？）様にする為だけとばかり……。
「本当にこんな物に修行について書かれてるの？」
「分からん。父上には”修行に関するとても重要なもの”だと、聞いてはいるが段ボールについてはそれ以上知らん」
「そういえばこの段ボールに最初詰められてたよね？あれやったのってやっぱり……」
「無論我の父の仕業だろう」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9036r/

ネコまた

2011年11月15日02時10分発行